

しげ いずみ てる お
茂 泉 昭 男

学位の種類 文学博士
学位記番号 文第51号
学位授与年月日 昭和61年6月26日
学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 初期キリスト教神学における倫理と形成
——アウグスティヌス研究——

論文審査委員 (主査)
教授 上妻 精 教授 岩田 靖夫
教授 柏原 啓一

論文内容の要旨

目次

一、まえがき	1
二、論文の目次	2
三、概要	10
四、参考文献	18

一、まえがき

本書はアウグスティヌスを中心とした「初期キリスト教神学における倫理と形成」に関する研究である。

「初期キリスト教」によってどの時代を指すかは研究者によって異なることは十分予想されることである。わたくしはこの用語の下に、中世に対して、キリスト教の早い頃、古代末期との思想的邂逅がようやく表面化し、キリスト教思想がヘレニズム思想と出会い、抗争と総合を経験する古代末期、その底流において中世思想の問題を準備しつつあった、いわゆる

エルンスト・トレルチがキリスト教古代 (die christliche Antike) と呼ぶ時代を中心に考えている。また、「初期キリスト教神学」という場合でも、「神学」(theologia) という術語が、その当時、教父たちの間で、今日用いられている意味において使用されていたわけではない(本書第Ⅴ部第一章参照)。しかし、アウグスティヌス思想の特徴を一言で述べるとすれば、「知解せんがために信ずる」(Credo ut intelligam) によっていいあらわされ、しかも〈信仰—知解〉の図式はヘレニズム生まれの思想的伝統には適用されがたいので、その意味ではアウグスティヌスの倫理思想の性格は神学的なそれである。宇宙論的問題のキリスト教的なとりあつかいの理論的な場は決して宇宙ではなく「神と人間」であったとカール・レヴィットが指摘しているように(Karl Lowith, *Meaning in History*, Univ. of Chicago Press; 1960, p.160) そこでは、古代ギリシアのいう自然といえども神の創造になるものであり、人間もまた神によって創造された存在であるという自然観が支配的である。したがって、創造者たる神について語ることが人間について語ることになり、神の恩寵、神の照明の思想について語ることが人間の形成について語ることになるという理解が成立する。しかしながら、本書では、アウグスティヌス思想の研究を狭い意味での神学に限定するものではない。その意味ではむしろ広く、もっぱら神学的諸課題を対象とする研究の狭い枠から離れて、人間の問題をめぐって古典古代が提出していらい問われてきたいくつかの主要な問題に対して、アウグスティヌスが如何なる理論を用意し、かつ時代精神を方向づけ、中世思想を準備しているか、倫理・人間論・教育論の視座からアウグスティヌス思想を考察しその史的意義を問うことを目的としている。また、表題で「形成」という場合、「形成」によってわたくしは、本書の第Ⅲ部以下第Ⅳ部、第Ⅴ部で取り扱っているところのアウグスティヌス独特の人格形成の考え方への探求を顧慮して単に「形成」とした。

二、論文の目次

第Ⅰ部 古代末期キリスト教倫理思想における徳の概念の成立	9
第一章 アンブロシウスの『聖職者の義務について』(De officiis ministrorum)	
——その思想と史的位置——	10
第一節 キリスト教以前のモラリスト	14
第二節 二つの義務論 De officiis	20
第三節 officium の言語使用	23
第四節 沈黙 silentia の倫理	26
第五節 四元徳のキケロ的解釈	30

第六節 諸徳の相互関係	34
第七節 アンブロシウスの解釈	38
第八節 残された問題——アンブロシウスからアウグスティヌスへ	42
第二章 アウグスティヌスにおける徳の概念の形成——愛と正義——	61
第一節 資料と方法	63
第二節 幸福の概念と確実性の探求	67
A <i>ἀρετή</i> —ars— <i>virtus</i>	67
B 『カトリック教会の道徳』(De moribus Ecclesiae catholicae) の構造	72
C 確実性の探求と幸福	77
D 幸福の条件	81
第二節 徳 <i>virtus</i> の概念	83
A 愛の対象と価値の担い手	83
B 古典的諸徳に対する態度	87
C 愛 <i>caritas</i> と正義 <i>justitia</i>	95
第三節 秩序づけられた愛 <i>ordinata dilectio</i> の概念	98
A <i>ordinata dilectio</i> と「二つの国」	98
B 輝ける悪徳 <i>splendida vitia</i> の解釈	100
第II部 アウグスティヌスの『神の国』(De civitate Dei) の倫理と国家論	123
第一章 『神の国』の多様性と統一性	125
第一節 『神の国』の区分と執筆年代	127
A 『神の国』の性格	127
B 『神の国』完成の背景	128
C 『神の国』各巻の執筆年代	129
第二節 『神の国』の統一性	132
A < <i>civitas mundi</i> > < <i>civitas terrena</i> > < <i>civitas diaboli</i> >	132
B 『再考録』からみた『神の国』	133
C 「三重の約束」	134
D 「二つの国」	136
第二章 「二つの国」の構想史と批判	143
第一節 『神の国』の構想史	145
第二節 『神の国』の歴史記述批判	147

第三章	ローマ帝国と神の国の理念	155
第一節	国家 <i>res publica</i> の概念規程	157
第二節	正義 <i>justitia</i> の徳	162
第三節	神の支配 <i>regnum Dei</i> と欲望による支配 <i>libido dominandi</i>	167
第四節	ローマ帝国への問い	170
第五節	教会と神の国の倫理	174
第Ⅲ部	アウグスティヌスにおける人間論	185
第一章	アウグスティヌスにおける人間論的概念	189
第一節	「人間」の構成要素	191
A	「人間の定義」	191
B	用語の問題	193
C	二分法か三分法か	197
第二節	アウグスティヌスの人間論の支点	202
A	心身統合の原理・ベルソナ概念	202
B	「霊-肉」論	208
第二章	アウグスティヌスにおける「神の像」(<i>Imago Dei</i>)の問題と形成	223
第一節	中世と宗教改革における(<i>Imago Dei</i>)の概念	227
A	トマス・アキナスの場合	227
B	マルティン・ルターの場合	231
C	ジャン・カルヴァンの場合	238
第二節	初期キリスト教文献にみられる <i>Imago Dei</i> の概念	245
A	初期諸文書の場合	245
B	イレナイウスの場合	247
C	オリゲネスの場合	251
D	アウグスティヌスへの道	254
第三節	アウグスティヌスにおける <i>Imago Dei</i> の概念	256
A	資料の概観	256
B	<i>similitudo</i> の解釈と <i>imago Dei</i>	257
C	アンブロシウスとヴィクトリーヌス	261
D	新しい解釈としての <i>ad imaginem Trinitatis</i>	263
E	<i>imago—imilitudo—aequalitas</i> の語義	266

F	<i>imago</i> の可能的解釈	268
第四節	恩寵と形成	271
A	語義と神学的人間論との結合	271
B	先行的恩寵 <i>gratia praeveniens</i> としての神の義	273
C	助力の恩寵 <i>gratia actualis</i> 、後続の恩寵 <i>gratia subsequens</i>	276
D	「神の像」の回復と形成の概念	280
第IV部	初期キリスト教神学における教育理論の成立	297
第一章	アウグスティヌス教育理論の基本的構造	299
第一節	アウグスティヌスの記号論——言語哲学的モチーフ	301
A	<signum-res>図式と問題の限定	301
B	記号 (<i>signum</i>) の分類	303
C	<i>signum</i> と <i>res</i> の定義	304
D	記号および「もの」の価値	307
E	<i>signum</i> (記号) の別の定義	309
第二節	記号 (<i>signum</i>) による意味伝達の可能性の問題——教育哲学的モチーフ	311
A	記号によらない意味伝達の可能性	311
B	記号による認識の不可能性	315
C	「内なる言葉」と記号の解読	318
第三節	「神の教育」の思想——神学的モチーフ	321
A	内的認識	321
B	真理判断の基準と「神の教育」	327
第二章	二つの『教師論』 (<i>De magistro</i>)	341
第一節	アウグスティヌスとトマス・アキナス	343
A	二つの『教師論』の接点	343
B	トマスの前にあるアウグスティヌスの『教師論』	345
C	アウグスティヌス『教師論』に対するトマスの批判的解釈	347
第二節	トマス・アキナスの知識伝達論	350
A	トマスの『教師論』の重点	350
B	「教える」「学ぶ」の内的構造	351
C	内的原理の二様態	353
D	<i>inventio</i> と <i>disciplina</i> の解釈	355

E	能動知性 (intellectus agens) の光	356
F	「自己教育」の概念の矛盾	357
G	結論と課題	360
第三章	アウグスティヌスの認識論における想起説の問題	369
第一節	アウグスティヌスの心理学	371
A	資料	371
B	記憶と想起	374
C	記憶の種類	376
D	感覚的認識と記憶	378
E	記憶と時間	381
第二節	記憶と神の認識—in te supra mentem	384
A	学問に関する記憶	384
B	情念、歓喜、浄福の記憶	388
C	魂の先在の思想と『教師論』	392
D	想起—探求—発見	396
第V部	アウグスティヌスにおけるキリスト教教育論—De doctrina christiana—	411
第一章	学問としてのキリスト教教育論	413
第一節	聖書と教育 (eruditio)	415
第二節	アウグスティヌスにおける学問—ヘレニズム的背景	418
A	理性に関する態度	418
B	学問の定義	419
C	学問の中の学問としての弁証論 (dialectica)	421
D	弁証論の成立の背景	422
E	ストアの学問分類	424
F	自然学と自然神学	426
G	キリスト教の学問としての De doctrina christiana	429
第二章	アウグスティヌスの聖書教育論	439
第一節	『キリスト教の教え』(De doctrina christiana) のオリジナリティ	441
第二節	真理 (res) の認識と隣人愛	444
A	『キリスト教の教え』第一巻の執筆年代の推定	444
B	<signum-res>図式と<uti-frui>図式の相即性	446

C 聖書教育と隣人愛	450
第三節 人格形成と聖書	456
むすび 古代末期とアウグスティヌス	463
文 献 目 録	(1)

三、概 要

本書は先きのべた目的に従って5つの部からなっている（目次参照のこと）。第Ⅰ部、第Ⅱ部においては倫理思想が、第Ⅲ部では人間論が、第Ⅳ部、第Ⅴ部では形成（教育思想）の問題が問われる。ここで順序に従って問題の所在、研究のねらい、方法などを示し、その概要をのべておくことが望ましいであろう。

しばしば、ギリシア哲学の示した徳アレテーについての古典的理解は初期キリスト教倫理思想の形成に深い影響を与えたといわれてきた。しかしそれはどのような意味ないし仕方においてであったか、となると必ずしも明かではない。そこで、第Ⅰ部では、古代末期を背景として、初期キリスト教神学は如何にして古典的な徳の概念を継承し、—そうした面があるとすれば—また自らの徳の概念をも明らかにしたか、初期キリスト教倫理成立のプロセスをとりあつかう。第一章において、キリスト教倫理に関する最も早い頃の文献であるアンブロシウスの『聖職者の義務について』（*De officiis ministrorum*）とキリスト教以前のモラリストと称されるキケロの同名の書『義務について』（*De officiis*）を取り挙げ、それらと比較検討することによってアンブロシウスにおけるキケロの受容と改作の構造を解明する。この場合、われわれはアレキサンドリアのユダヤ教哲学者フィロンの『徳について』（*De virtutibus*）をも考慮する。フィロンはタイポロジカルな意味合いでアンブロシウスの先駆者とみられるからである。先ず我々は徳の概念をめぐるフィロンとキケロとの相違を考察し、次にヘブルの懐旧としてはアンブロシウスはキケロよりはフィロンに近いが、結局、アンブロシウスがキケロの右の同名の書を下敷として〈*prudentia-justitia*〉の徳の図式をフィロンを媒介として〈*sapientia-justitia*〉の図式に解釈転換して、古代末期におけるキケロとフィロンの総合者としての位置を持っていることを示す。それとともに、われわれはギリシアの諸徳がアンブロシウスの神の言への「沈黙と聴従」の倫理の中で再生され、修道院倫理を基礎づけていることを明らかにする。その場合、ストアの自然の秩序に基づく考えが市民的正義の概念とともに、キケロを通してアンブロシウスのキリスト教倫理の中に入り、ノモス・モチーフとして内包されていることが知られる。第二章は、アウグスティヌスにおける徳の概念の形成に関する考察である。ここでの考察の特徴は、時代的精神との交渉を、アンブ

ロシウスの場合におけるように、源流思想を異にする二つの文献の比較考察による方法によってではなく、『カトリック教会の道徳』(De moribus Ecclesiae catholicae)に見出されるアウグスティヌス自身の方法を採用し、それを基礎にして考察をすすめた点であろう。そしてここでは、アンブロシウスの前掲書と並んで初期キリスト教倫理に関する最初の文献の一つとみられる比の書と後年の大著『神の国』(De civitate Dei)とを結び、必要に応じて資料を敷衍して形成過程の論旨を明らかにする方法で作業が進められている。読者はここでの考察の経緯と結論とがアンブロシウスの場合と性格を異にしていることに気づかれるであろう。それは採用された研究方法の違いにもよるが、より多くはアウグスティヌスの思惟の実存的性格にもよる。デカルトが自説を強固にする権威としたといわれる「私は欺かれているならば私は存在する」(Si fallor sum)という存在理解には特別な生理解があり、「私は生きているのを知っている」(Scio me vivere)の生(vivere)の構造の分析と解釈に頁がさかかっているのもそのことを示している。生(vivere)の構造理解が段階を追って発展史的に、しかも組織的に明らかにされ、そのプロセスにおいて古代末期の時代精神としての新プラトン、ストア思想との交渉ないし影響がみきわめられ、アウグスティヌスにおけるキリスト教倫理の形成の仕方とその特質とが明らかにされるとすれば、それは同時にパウロ神学やヨハネの思想との交渉を予想することによってでなければならない。よって、われわれはそのことを作業仮設として十分に意識しながら、アウグスティヌスにおいて徳の理念が「正義と愛」(justitia-caritas)の概念に凝縮されてゆく思考のプロセスを明らかにした。しかしそれに止まらず、それが「愛の秩序」(ordo amoris)の概念を媒介として「秩序づけられた愛」(dilectio ordinata)として基礎づけられてゆくことを示した。さらにアウグスティヌスでは、その秩序の根柢は、パウロ神学の研究の成果とあいまって「神の正義」(justitia Dei)「神の愛」(caritas Dei)に還元されていっていることを考察した。こうした考察を通して、われわれの研究は、パウロ神学との交渉はアウグスティヌスの場合アンブロシウスより深くかつ密接であること、かつ古代末期におけるキリスト教倫理は、信仰概念の形成過程とあいまって、アウグスティヌスにおいて、より内面化され、神の「正義」の概念のなかで成立していることを認識するものとなっている。この地平において「輝ける悪徳」(splendida vitia)の試論的解釈の試みもまたわれわれにとってはじめて可能となるものと思われる。そこでこのことについて簡単にはあるが解釈の骨子を示した。

以上キリスト教倫理は、早い頃の、倫理に関する二つのキリスト教文献にみられる限り、古典的諸徳の概念と出会って、古代末期の精神的理念を自らのうちに否定的媒介的に包摂しつつ、かつそれに対して自らの徳の概念として神の正義と愛の倫理を明確にし、中世思想を方向づけていったといえよう。

第Ⅱ部ではアウグスティヌスの国家論が問われている。資料は『神の国』(De civitate Dei)である。『神の国』に統一性があるのか。第一章の考察はこの問題であり、「二つの国」(duae civitates)が『神の国』の中心テーマであることが分析される。しかし「二つの国」とは何を指し、どのような哲学のなかで論じられているのであろうか。アウグスティヌス研究における一つの問題である。しかも、アウグスティヌスは『神の国』のなかで彼の国家論を展開しているのであるから、「神の国」(civitas Dei)に対して「地の国」(civitas terrena)、「神の支配」(regnum Dei)に対して「悪魔の支配」(regnum diaboli)という二つの領域との関連の下で国家について考えていることが十分に予想される。そこでわれわれは第二章において『神の国』の構想史を跡づけ歴史哲学(歴史の神学)の支点を明らかにしながら若干の準備をした後で、特定し難いこの「二つの国」の解釈にかかわる困難な問題の解明にはいる(第三章)。そもそもアウグスティヌスはなぜ『神の国』で国家論を展開しているのであろうか。彼にとって歴史的現実の地上の国はローマ帝国であり神の国は教会であったのであろうか。アウグスティヌス自身そうした根本的な問の下に、ローマ帝国と教会との双方を古典的な国家論を手がかりとして反省し、かつ神学的観点から彼自身の国家論を基礎づける必要を感じている。アウグスティヌスの国家論の主たる論述箇所は第二巻と第一九巻にみとめられるので、この場合資料をそれらに限定した。これらの箇所はわれわれの考察によれば明らかに執筆年代を異にし(第一章)、両者の間には十年以上もの隔たりがあることが知られる。従って、それぞれの国家論のアウグスティヌスの論旨に変化がみられることがあったとしても不思議ではない。われわれはその間にどのような共通点と相違点、そして総合の思想を読むことができるのであろうか。その理念を支える倫理的概念は何かをそこに尋ねる。アウグスティヌスはスキピオの国家論に従ってくみだてられたキケロの『国家論』(De re publica)に賛意を表し、最初その中で自説を確立する方法をとっている。その方法は、徳の概念においてかってアンブロシウスが、パナエティウスの義務論に従ったキケロの義務論を基礎として自説を展開したのに類似している。いま国家の概念規定を中心にそれをみると、〈国家=国民の福祉=法の一致=共同の利益=正義〉の図式に国家成立の根本原理を見るキケロの市民的正義の国家論から、神的正義としての神のゆるしと愛の支配に国家成立の根拠を見る国家論への移行が認められる。この観点からすれば、ローマ帝国は真の国家ではないと批判される。アウグスティヌスのそうした国家の定義と批判はその根拠がキリストの支配(regnum Christi)と「悪魔の支配」(regnum diaboli)、神の支配(regnum Dei)と欲望の支配(libido dominandi)という「二つの国」の理念にあることを措定することによって一貫した国家哲学となっている。アウグスティヌスはこの理念の下にローマ帝国のみならず現実の教会をも鳥瞰し、それらがいずれか一方の支配に限定されて理解されることを斥け、

両者の混合をもってそれらを特徴づける。そしてその完成を神の正義と愛の恩寵の下に委ね、「愛の秩序」(ordo amoris)「秩序づけられた愛」(ordinata dilectio)によって実現され、「愛によって働く信仰」として生きる終末論的責任倫理を徹底して説く。われわれはここに古代末期を背景としてキリスト教歴史観の下に国家論の倫理的基礎が超越論的な仕方基礎づけられているのをアウグスティヌスの倫理思想の中に認識する。

第Ⅲ部ではアウグスティヌスの人間論を問うている。ここでの問いは人間や国家・共同体の形成目標ないし基礎理念としての倫理的徳の概念は何であるかというこれまでの問いと異なって「人間」そのものの哲学的(第一章)・神学的理解(第二章)とかわる。最初の論考はアウグスティヌス人間論の心身論からの考察である。anima, animus, ratio, mens, intellectus などの言語使用の多岐性から、彼の人間論が三分法の人間論か二分法のそれであるのかその決定は困難であること、むしろ心身結合の原理から見るべきであることが指摘される。それにしてもそうした「結合」の概念をアウグスティヌスの使用している compositus, constans, mixtus から説明し、それらがどのような人間論的意味を持つのか明らかにされなければならない。それは混合しない結合 unio inconfusa と解されるが、アウグスティヌスの場合、理念から言えばいわば分離可能なプラトンの unio inconfusa ではなく、その意味ではむしろ第三の新しい実体への移行を意味するストア的 *κρᾶσις* (mixing) に方向づけられた unio inconfusa と解さなければならない。こうした形容矛盾にも似た、不可分の全体としての人間理解を心身論の教説から区別してそれ自体として解明するにふさわしいアウグスティヌスの人間論的概念はペルソナ概念にはかならず、そうした人間の把握がアウグスティヌスのこのテーマの中心に存する。心身結合のストア的原理を媒介としてのアウグスティヌスの作業は、愛、ペルソナの統合原理による人間の統一性を示す理論的努力はみとめられるが、どれだけ成功しているかその評価はむずかしい。むしろ、アウグスティヌスの人間論は、パウロ神学から学んだ「霊-肉」論の上に成り立っている人間論であることにその面目があるように思われる。そこで、われわれは、アウグスティヌスがストア的、エピクロスの立場からの「霊-肉」論の誤った解釈を斥けて、パウロ思想から「内なる人」(homo interior)としての「霊に従って生きる」(secundum spiritum vivere) 人間の人間論を説いていること、アウグスティヌスの人間論が宗教的人間概念の中に、形成されるべき「新しい人間」の全体像を結んでいることを明らかにした(第一章第二節)。ところで、こうしたアウグスティヌスの人間論への問いは、人間形成の課題に重要な指針を与える部分を含んでいることはいうまでもない。すなわち、人間論の問題は次の第Ⅳ部で扱った「教育は如何にして可能であるか。」という問題と密接に結びついている。アウグスティヌス研究におけるこの面の作業はおのずからもう一つ別の次元からのアプローチを要求してくる。それは、神

学的人間論考に助けられなければならないということである。われわれが本書において第IV部のすぐ前に「神の像」(imago Dei)の概念の考察をする課題をおいた(第III部第二章)のはもっぱらその理由による。しかし、この設問は、これまでの問いの形式と異なり、ヘレニズム思想との比較検討において行われるというよりは、問題の性質上、むしろ純然たるキリスト教神学における問題である。そこで先ず、イマゴ・デイの問題で何処が問題であるのかを認識するために、中世のトマスと宗教改革者ルターとカルヴァンの見解を検討し、ついで初期キリスト教文献にみられるこの概念の解釈の特徴を(イレナイウス、オリゲネス、ヴィクトリヌス、アンブロシウスにおいて)示し、アウグスティヌスへの道を準備した(第二章第一節・第二節)。本文図表に示したように、資料に基づいてアウグスティヌスのこの概念の形成の過程とその特徴をも示した。アウグスティヌスは<imago>と<similitudo>の概念の区別とその解釈において宗教改革者の批判をまぬかれ得なかったが、人間論としてはなお十分な意味を持っていること、しかし解釈の系譜としては<イレナイウス、ヴィクトリヌス、トマス>の線にアウグスティヌスを入れて位置づけることは困難ではないかと思う。しかし人間回復の神学的人間の理解という広い面ではトマスと宗教改革者はともにアウグスティヌスの中に同居しているように思われる。すなわち、「形成をキリストに見出す」点と、なお「完成」の理念を残している点においてである。しかし、いずれにせよアウグスティヌスの人間論の考察が結果するところの、形成における「先行の恩寵」(gratia praeveniens)と「後続の恩寵」(gratia subsequens)の恩寵思想は、アウグスティヌスの形成論の中心思想であり(中世のアンセルムスに継承された)、続く第IV部の教育理論の構造解釈を根拠のあるものとして成立せしめる底流となっている。

かくて第IV部はアウグスティヌスの教育理論を取り扱う。「教育は如何にして可能であるか」。この問いはソクラテス以来の古典的な問いであると同時にきわめて現代的な問いでもある。教育の問題は、真理の認識と伝達に関する問いを含んでいる。それは認識論、伝達論に関係するのみならず、なかなづくアウグスティヌスの場合、教師の問題により焦点がしばられている。教師自身形成の問題と深く関連して創造論的、救済論的地平からの問いかけの中におかれている。そうであるとすれば、人間は何処に向けて形成されたらよいのか、というごくありふれた通常の問いでさえも、誰が形成するのか、人間の教師であるのか、形成の第一原因者は誰なのか、という根本的反省が要求されてくる。そこでこの部ではアウグスティヌスの教育論の基本構造を探ね、アウグスティヌスの持っている理論をとり出す作業をすることになる。論議の資料は主として初期の『教師論』(De magistro)、中期の『キリスト教の教え』(De doctrina christiana)に依存する。そして、われわれはそれらを骨子として他の資料を加える。要点をのべれば、アウグスティヌスの教育論(形成論)には三つのモティー

フがある。(1)言語哲学的モチーフ、(2)教育哲学的モチーフ、(3)神学的モチーフである。それぞれ次の三つの問いと関連している。すなわち、(一)教師の伝達機能は何か、(二)教師は教えることができるか、(三)真の教師は誰であるのか。最初の問いは「アウグスティヌスの記号論」、次のものは「記号による意味伝達の可能性の問題」として、最後の問いは「神の教育の思想」としてあらわれている。ストア思想を背景として成立しているとみられる言語の理論は、教師は教え得ないというソクラテス（プラトン）的命題を立証する理論となり、聖書、パウロ神学、アレキサンドリアのクレメンスに継承されているキリスト教的パラドシス（「主のパイディア」「キリストに在るパイディア」「育てる神」「ロゴス教師論」）と結合して「神の教育」の教育思想が理論として形をむすび、キリスト教神学がはじめて達成することのできた超越論的教育論の理論が形成されている（むすび「古代末期とアウグスティヌス」参照）。初期キリスト教神学はここではじめて教育に関する理論の成立を古代末期にみたといえる。第一章はそうした論証である。

さて、アウグスティヌスでとらえられたこの問題は中世においてトマスに継承され、トマスの『真理論』（De veritate）における問題十一の『教師論』（De magistro）で取り扱われている。第IV部の第二章において『神学大全』とこの書に資料を限定してトマスの考え方を考察することにした。そこには明らかにアウグスティヌスに学びながらアリストテレスをもって批判的に総合してゆくトマスの立場が見られる。両者の相違と共通点を一言で述べるとすれば、両者の間には人間の自然理性、照明説、認識の理解において論点の相違がみとめられる。アウグスティヌスがプラトンのものであるのに対してトマスはアリストテレスの理論を基礎としている。われわれの問題の領域に限定していえば、前者が人間変革の（超越論的な仕方での）内的インパクトを重視している教育論であるのに対して、後者のそれは知識の種子的原理（rationes seminales）、能動知性（intellectus agens）の働きを重んじ、感覚から可知的知識を抽出する知的学習を説き、発達の要素をより重んずる形成論となっている。前者が「知解せんがために信ずる」（Credo ut intelligam）の信（credere）により強調をおいているといえるとしたら、後者は知解（intelligere）の方により詳細な検討をしているといえるであろうか。しかし信仰と理性の領域の方向を異にした無限定性が両者の理論にそれぞれの特徴を与えていると同時に問題をも残しているものと思われる。後者が諸原理の最初の知識（scientia principiorum）の先在を説き、自然理性の光を認めている点など前者との論点の相違は認められなければならない。しかし、神的照明説の下で、知識の第一原因者を神とし、「神の教育」を説いている点、両者は共通してキリスト教の教育理論の理論的形成者となっているといえる。第IV部ではそうした歴史的視点において、古代末期、初期キリスト教の教育の理論（教育神学）をはじめて樹立し、トマスの先駆者としてもあったアウグスティヌス

の意義が知られる。この部の最後におかれた第三章はアウグスティヌスの教育論を暗示して想起説のそれとするトマスの批判にうながされて『告白録』を中心として批判的に検討された論述である。なお研究の余地を残していると思われるが、われわれの結果は全体としてトマスの観察を肯定する解釈となっていない。結論は、神の創造、神の照明と恩寵の思想にその根拠が帰されている。

第Ⅴ部は第Ⅳ部の範囲を更に狭め、「キリスト教教育」の理論的考察をアウグスティヌス思想にみる試みである。従って、キリスト教の「教育理論」を考察した第Ⅳ部とは厳密な意味で区別されなければならない。結論を先にいえば、聖書の持つ教育論的位置、聖書の教育がアウグスティヌスの学問理解の中で学として持つ位置（第一章）、聖書の真理の伝達がアウグスティヌスの世界観、人間観の中で持つ意義、聖書研究による形成論が示唆される（第二章）。ここでは超越論的人格の真理との邂逅が、伝えるものと学ぶ者にと「逆説的体験の類比」の構造の中で起こり、教育論は深い意味で再生論でなければならないことが論じられる。むすびは、これまで論じられたアウグスティヌスの教育思想の、鳥瞰による史的位置づけを試みたものである。

本研究は、先にも述べたように、構成としては五つの部門からなっているが、問いの理念からすれば基本的には三つである。すなわち、キリスト教的徳の根本概念は何か（倫理）、人間理解の根本は何か（人間論）、人間形成の根本構造は何か（教育論）、それらを古代末期における初期キリスト教最大の教父アウグスティヌスの思想をして語らせることであった。この困難な作業に当たって、わたくしは先ず資料に即することを基本としたが、テキストを分析し、それぞれの思想的源流をたずねてそのすべてを先人に還元する方法はこれをとらず（それは不可能に近い）、むしろそれらがある中心的原理にそってどのように総合されているか、アウグスティヌスの指し示している全体的理念の把握につとめた。そうしたことは事柄としては論を俟たないことであるが、内的発展をとげた思想家の場合、しばしば矛盾とさえみえるテキストの理解は困難である。その場合、資料の解釈は、ある主要な概念との無理のない関連の中で、より広いコンテキストに即して、全体として総合的解釈を示すことが大切であろう。そしてわたくしはそれに従った。もとより本研究においてはその解釈においてなお研究の余地を残している問題もある。その場合でさえ、わたくしとしてはむしろ何処が問題なのか本研究において少しでも明らかにされることを願った。

最近わが国においてもアウグスティヌス研究は、『アウグスティヌス著作集』（教文館）の刊行と共にますます本格的研究の領域に分け行ってゆくものと思われる。「日本におけるアウグスティヌス研究」（小野忠信『神学年報』（5）1966年）、「日本におけるアウグスティヌス

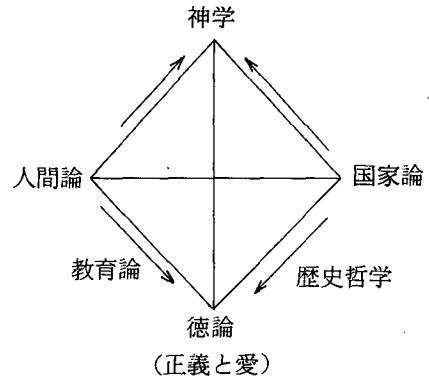
ス文献」(宮谷宣史『神学研究』(25)1976年)、「日本における教父研究」(P. Nemeshegyi, *Études patristiques au Japon*; in: *Revue des Études Augustiniennes*, vol. XXV11, 1981)はそうしたことを期待させる。海外の研究の動向については、古くはネブレダの文献目録(R. P. Nebreda, *Bibliographia Augustiniana*, Roma 1928)、比較的最近のものとしては、アンドゥレゼン(C. Andresen, *Bibliographia Augustiniana*, Darmstadt 1973)のもの、その他いくつかの研究年報・雑誌によって知ることができる。本研究は部分的に、後述の文献目録に挙げておいた諸研究から、あるいは直接的にあるいは間接的に、いくつかの重要な示唆を与えられている。その都度註として典拠を示しておいたが、それらと解釈と結論を同じくしないところも少なくない。本書の論考はある場合にはテキストによって語らせ、記述的、説明的であり、またある場合には批判的方法をとり、問題を提示する形でわれわれ自身の解釈を選びかつ総合する方法をとっている。本書の全体にわたって、われわれの考究に何らかの特徴が認められるとすれば、それは、キリスト教倫理における徳の概念の形成とキリスト教教育の理論が、古代末期という思想史的状况の中で、未だ理論的には未形成であったキリスト教において、アウグスティヌスの恩寵思想の中で形をなし超越論的な仕方でも成立したことを示し、そして、その理論の史的意義を明らかにしようとする方法を全体として採用していることであろう。少なくともそうした研究の内容を示す意味において、本研究を、「アウグスティヌス研究」という副題をそえて、「初期キリスト教神学における倫理と形成」と題した次第である。

四、参考文献 省略

論文審査結果の要旨

1. ヨーロッパの精神伝統がヘレニズムとヘブライズムとの総合において成立しているとき、アウグスティヌス(354-430)がこの伝統の源流に立つものであることは周知の通りである。しかし、従来のアウグスティヌス研究が『三位一体論』(399-419)や『神の国』(413-426)を中心にキリスト教神学の成立、或は歴史哲学の成立という観点からの研究を主流とするとき、本論文は『カトリック教会の道徳』(388-389)に出発して『教師論』(389)より『キリスト教の教え』(396/397-426/427)に至る、即ち倫理と人間形成の問題こそアウグスティヌス理解の重要な視座を形づくるものであるという独自の見解に立ち、この見解を裏づけるかたちで『三位一体論』や『神の国』を含めてアウグスティヌスの思想を考察し、その意義を明らかにしたものと画期的なものである。

2. 倫理は徳論に始まり、徳論に終ると言っても過言ではない。そして徳は客観的に実現されれば国家社会の共同生活を支える基盤となるとともに、主体的に内面化されれば個人としての人間形成の原理となる。そして人間形成はまた優れて教育の問題でもある。従って本論文は大きく『カトリック教会の道德』のうちに結実される古代末期キリスト教倫理思想における徳の概念の成立を論ずる第Ⅰ部と、『神の国』を



中心にアウグスティヌスの国家論を論ずる第Ⅱ部と、人間形成の基礎となる人間論を問う第Ⅲ部と、教育論を論ずる第Ⅳ部と第Ⅴ部に分節化される。教育論が第Ⅳ部と第Ⅴ部に区分されるのは、第Ⅳ部では『教師論』を中心としての、第Ⅴ部では『キリストの教え』を中心としての展開となっているからである。

ここに徳論（倫理）を基礎にして、その実現を論ずる国家論と人間論とを両極にして、しかもこれらの理論がアウグスティヌスにおいて恩寵思想に支えられ超越論的な仕方でも成立しているとき、上図のように四肢構造のうちにアウグスティヌスの思想の全体が展望されることになる。必ずしも体系的な思想家ではないアウグスティヌスの思想展開をこのような構造において把握しようとする試みは、論者の卓見として高く評価されて良いものである。

3. 徳論の成立を論ずる第Ⅰ部では、先ずキリスト教倫理の最も初期の文献と言われるアンブロシウスの『聖職者の義務について』が取り上げられ、その分析を通してケクロとフィロンの総合者としてのアンブロシウスの位置が示されると共に、アウグスティヌスに先立つ古代末期の思想史の状況が明らかにされる。続いてアウグスティヌスの『カトリック教会の道德』が取り上げられ、そこにアウグスティヌスにおいて徳の概念が魂の卓越性という古代ギリシアの徳の概念を継承しながら、神への愛に基礎づけられて成立していることが論証される。この神への愛が単なる心情ではなく、確固とした創造の秩序に即して、この秩序を魂の中に実現するものとして成立していること、したがって正しく秩序づけられた愛として、アウグスティヌスにおいては愛が即ち正義であり、その他の諸徳はこれによってはじめて価値をもつものとされたことが論証される。そして、そこに新プラトン派、ストア派の思想との交渉と並んでパウロ神学の決定的影響が示され、ここにアウグスティヌスがアンブロシウスなど先行する思想家から異なり、真の意味でのキリスト教倫理の形成者となった所以があるとされる。厳密な文献学的考証に立って、広い思想史的連関においてアウグスティヌスの思想を考察するという態度は、本論文を通して一貫する論者の姿勢であるが、この第Ⅰ部は

第Ⅲ部と共に、こうした特色を最も良く示すものと言って良い。

4. アウグスティヌスが『神の国』において最後の世界審判に至る「神の国」と「地の国」との戦いの中に国家そして人類史の意義を認め、そこに独自の歴史哲学を展開したことは良く知られている。しかし13年を要して書かれ全22巻からなる『神の国』の構造は決して単純なものではない。「二つの国」の概念は11巻に続く後半において展開されるものであり、前半は異教の神々に対する厳しい批判である。そこに『神の国』に統一性があるかという問いが生まれる。論者は第Ⅱ部においてこの問いを引き受けることに出発し、『神の国』の全体を、ローマ帝国の崩壊、世界の終焉を予感するアウグスティヌスの危機意識から統一的に解釈する。そしてそこに「二つの国」の概念、その思想史的系譜、現実のローマ帝国及びキリスト教会との関係を問うと共に、改めてアウグスティヌスの国家論が愛と正義の倫理の上に構想されていることを明らかにする。市民的正義に立つキケロの国家論に対して、徹底的に終末論的歴史観に裏打ちされているところにアウグスティヌスの国家論の成立を見る論者の眼にはたしかなものがあり、それは論者が歴史哲学という言葉を目を避けて終始「歴史の神学」と語るところにも窺えることである。

5. 第Ⅲ部においては、論者はアウグスティヌスの人間論が魂 (anima) と身体 (corpus) の二分法に立つ人間論か、これに霊 (spiritus) を加えた三分法に立つ人間論かを問うことに出発し、これを整理していく過程を通して、アウグスティヌスの人間論が、最初プラトン派の存在論やストア派の宇宙論の影響下に始まり、それがパウロ的人間理解に包摂されて次第に前者から脱却していくという思想史的経過で成立していることを論証する。と同時に、この経過がアウグスティヌスにおいて人間を形而上学的、存在論的構造において見る次元から、倫理的、宗教的構造において見る次元への移行をともなうものであることが示され、そして二分法と言うも、三分法と言うも、いずれも前者の次元での観察に立つものであり、後者の次元に立つ時には霊と肉との対立において人間が見守られていることが明らかにされる。そして、この分析を承けて論者は続けてアウグスティヌスにおける *imago Dei* の概念を取り上げる。そこにアウグスティヌスによれば、人間は神の像 (*imago*) に従って創造されたが、それはイエスにおけるように神と等質 (*aequalitas*) の関係においてではなく、類似 (*similitudo*) の関係において創造されたものであり、そして墮罪とはこの *similitudo* の喪失であり、救済とはこの *dissimilitudo* を除去して *similitudo* を回復して *imago* と合体することを意味するとされる。そして、恩寵による神の像の回復にアウグスティヌスの自由意志論と恩寵論とが見守られる。同時に *imago Dei* の概念の思想史的系譜が辿られ、*imago* と *similitudo* とを完全に区別するトマス、両者を同一視するルター、カルヴァンとの対比において、このアウグスティヌスの理解の独自の位置が示される。このアウグスティヌスの

創造論思想に基づく神学的人間論の展開は、続く教育論の前提になるものであるが、本論文において論者の深い思索力と解釈力を最もよく示すものであると言って良い。

6. 教育は教育が言葉（記号）を用いて事柄についての知識を学ぶ者に伝達するところに成立する。そこで教育論を論ずる第Ⅳ部と第Ⅴ部においては、論者は先ず言葉（記号）と事柄との関係、そして伝達の可能性をめぐるアウグスティヌスの所説の検討から出発する。そして問いを言語哲学的な次元から、教育学的な次元へ、さらに神学的な次元に掘り下げることによって、そこにプラトンの想起説の影響下に出発しながら、これを脱皮して照明説に至る経過が辿られる。照明説においては最終的に真の教師は神のみであり、人間の教師は教え得ず、ただ自らが内面性において真理を求め、神と出会い、人格的回心に生きる時、その実存において学ぶ者のうちにも内的インパクトを呼び起こし、学ぶ者も同じ体験に生きるように促される。論者はこれを逆説的体験の類比と語る。そして、そこに再生論としての教育論をよみとる。アウグスティヌスの教育論を、その言語論、認識論、心理学にまで遡って問うと共に、神の創造、神の照明と恩寵の思想のうちに基礎づける論者の展開は、観点を尽くした周到なものであり、極めて貴重なものと言えよう。

7. もっとも本論文がその視座からする制限を負っていることも事実である。すなわち、四肢構造の中でアウグスティヌスの思想を展開しようとする時、アウグスティヌス自身の思索の内面的発展の側面はその前に何ほどか整除されることを免れず、また広い思想史的連関の中でアウグスティヌスの思想を位置づけようとする試みは、現代的観点からする大胆なアウグスティヌス解釈を抑制するものとなっている。しかし、これらはその視座からする当然の限界を示すものであって、本論文の価値をいささかも減ずるものではない。本論文がアウグスティヌス研究に新しい局面を拓いたものであることは確かである。

以上の理由により、本論文の提出者は、文学博士の学位を授與するに十分な資格を有するものと認められる。